
アルビノが赤く染まる頃

狂風師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルビノが赤く染まる頃

【Nコード】

N70390

【作者名】

狂風師

【あらすじ】

主人公がアルビノの少女と出会い…

（前書き）

模試が暇だったのでまた書いた。

途中、物凄い話が広がるけど気にしない。

軽い流血表現注意。

キンコンカンコン…

俺「終わったあ…」

自己紹介？ そんなのは省く。

今ようやくテストが終わったんだ。そっとしておいでくれ…。

友人（男）「よあ、どーだったよ」

俺「…うるさい」

友人「つれねーな」

…つれなくていいから、さっさとどこかに行ってしまえ。

こちらら眠いんじゃボケ！

彼女「テスト…どうだった？」

俺「まあまあかな」

友人「あつ！ てめえ！ 俺とは喋らないクセに！！」

野郎となんか喋っても、何も面白くねえんだよ。少しはわかれよ。

俺「せっかくテストも終わったんだ。どっか行かないか？」

彼女「…ごめん。私、家に帰らないと…」

何だかフラれた気分。別にそういう関係じゃないけどさ。

高校に入ってから、ずっと同じクラスなんだよ。これで3年目。

だから仲が良いっていうか、まあ友達みたいな。

自己紹介と彼女について詳しく？ わかった、後でしてやるよ。
後でな。

友人「俺もどっか行きたい！」

俺「てめーはダメだ」

先にこいつの紹介でも。

俺の友人。以上、終わり。

俺「そう言えばさ、お前って俺と帰る方向同じじゃない？」

彼女「そうなのかな？」

俺「登校中にたまに見かけるし」

声はかけたことないけど、少なくとも方角は同じだ。もしかしたら、けっこう近所だったり。

…そうだ。

俺「遊び行っでいいか？ 家に」

彼女「えっ!？」

…アレ？ 俺、なにかとんでもない事言ってしまった様な…。

ど、どど、どうしよう。何か、何か誤魔化さないと…。

俺「い、いや、ほら、ヒマだし家近そうだし」

あああああ！ 何言ってるんだ、俺は!!

女の家に遊びに行きたいだなんて。どうした俺。

テストが終わって病んでしまったのか!？

彼女「でも…あの…」

ほら！ すぐく引いてるじゃん!! ああ…俺…オワツタナ…。

どーでもいいや…。これからの学校生活、変なあだ名つけられる
んだろうな…。

考えると鬱になるぜ…。

待てよ。どうせあだ名つくんだったら、行った方が得じゃね？
こんなチャンス滅多にないし。

俺「そんなに嫌ならいいんだ…。どうせ俺なんて…」

悲しいヒーロー的な？ 素直で優しい奴ほど効果は高い。

そして案の定…

彼女「き、嫌いなんかじゃないよ！ でも…」

あれ？ 効いた？ まあ、もう一押し。

俺「一度でいいから見てみたかったな…」

…くさっ！ 何これ。物凄く臭う！ いっその事死んでしまおうか。

彼女「…少しだけだよ？ 誰にも言わないでね？」

俺「ん？ あ、ああ」

誰にも言わないで？

妙な引っ掛かりを感じた。どういうこと？ 家に俺を誘った事を誰にも言うなって？

何かあるのか？ 例えば、家の人が厳しい、とか。あつ、あれか！

相手が俺だから、変な噂されたくないってことか！ ……そういう意味なのか…。

自転車で彼女の家に向かう。まだ昼過ぎ。

大体の方向は俺の家と同じだ。

適当に会話しながら…って言っても、あんまり喋らないけど。

そうだ、ここら辺で彼女の紹介でも。

クラスの中でも大人しい方で、頭が良い。一人はいるよな、こういう良い奴。

そんでもって、なぜか俺と仲が良い。波長的な何かが合うんだろ
うな。

黒髪ロング。風でサラサラと揺れて。後ろを追いかける俺としては、まさにご褒美。

これでスカートでも、こう…ヒラ…ってなったら、もっと良いんだけどな！

まあ、見えないのも良いって言うか。つまり、何が言いたいかと言つと

ヘブン状態！ 神様ありがとう。顔がにやけるぜ、ちくしょう。

彼女「…着いたよ?」

俺「ニヤニヤ…はっ!」

彼女「…？」

着いたって！ みんな、妄想終わり終わり！

俺「へえ…ここがお前の家かあ…」

特にこれと言って豪華でもなく、ボロでもなく、一般的な家。

一つ違うとしたら…

俺「なんでカーテン全部閉めてるの？」

そういうこと。2階の部屋までキッチリ閉めてある。

彼女「き、気にしないで」

俺「家の中…入ってもいいんだよね？」

彼女「うん…少しだけなら」

…やっぱり引かかる。何か知られたくない事があるみたいな言い方。

彼女「あ、あんまり大きな声は出さないでね」

…何かあるな、こりゃ。俺、地雷踏んだ？

玄関に潜入。いや、ちゃんと普通に入ったよ？

これと言って変わった所はない。暗いけど。

先にリビングに行くように言われた。まあ、従うしかないな。

けど…やっぱり暗いんだけど。カーテン閉めてるもんな…。それが何かしらの秘密と関係があるのか？

ま、とりあえず電気くらいつけてもいいだろ。

すぐ隣の壁を見ればスイッチがあった。

俺「これか」

そのスイッチを押そうとした瞬間。

？「つけないで」

え？…誰がいる。金縛りになったみたいに動かなく…いや、動けなくなる。

背筋が異常に冷たい。心臓は飛び出しそうなくらいに激しく動いているのに。

？「つけないで。暗い方がいいの」

再度声がする。まるで錆付いたロボットのように、自分の頭を動かして、その声の方を見る。そこにいたのは…

？「誰？」

白い服、白い肌、白い髪、赤い目の少女。その少女が、こちらを見て首をかしげている。

そのあまりにも幻想的というか神秘的な少女の姿。

その姿と仕草も俺は見惚れてしまった。

俺「…アルビノ…？」

彼女「…そう」

俺の背後から声。また俺は金縛りのような感覚に苛まれた。

彼女「先天性色素欠乏症。…私の妹」

あまりに衝撃的すぎる日常。

日常なのに、何か別の世界に迷い込んでしまったよう。

少女「…お姉ちゃん。この人だね？」

彼女「私の友達かな？」

かなって…。いや、今はそんな事どうでもいい。

アルビノって…え？ あのアルビノ？

彼女「誰にも言わないでね…？」

そういう事か。アルビノは日光に弱いってwikiなんちゃらで見たな。それでカーテンを閉めてるのか。

しかし…何ていうか…かわいい。じゃなくって、こんな身近にいたなんて…。

非日常すぎる…。ああ、これは夢なのか？ テスト中に見てる夢なんだろう？

少女「……」

彼女「…大丈夫？」

はっ！？ 俺は何を？

俺「夢じゃ…ないよな…？」

彼女は静かに頷いた。

俺「じゃあ、アルビノっていうのも…」

今度は少女が頷いた。

俺「……」

いや…もう…喋れねえよ…。

アルビノの人が実在するのは知ってるけどさ…。こつも突然…。

長くて重い沈黙の時間。

3人とも何も言えない。流れているのは外の風の音だけ。

彼女「わ、私、お茶が何か持ってくるね」

先に沈黙を破ったのは彼女だった。

別に、遠くに行ったわけでも無いのに、俺と少女の2人きりになった。

どうしても見とれてしまう。物凄く綺麗でかわいい…。引き込まれそうになる瞳。

少女もまた何も言わずに俺を見ていた。物珍しい生き物でも見るかのような目で。

もちろん、そんなに長い時間見つめていたわけじゃない。

お茶を持ってきてくれた時にやめた。でも、すごく長い時間に感じた。

それからはあまり覚えていない。自分の体がふわふわしたような、変な感じだった。

ただ一つ覚えている事。帰ろうとした時に聞いた一つのセリフ。

『彼女「また来てね」』と。

それだけが頭から離れない。

翌日。授業後。

友人「かーえろーうぜー。…どしたの？」

どしたのってな…俺の顔でも歪んでますか？

友人「聞こえてますかー」

俺「聞こえてるから。耳元でうるさいから」

友人「なんか考え事かい？」

…昨日の事…なんて言えない。あいつの妹がアルビノなんて…。

友人「？」

俺「気にすんな。帰るぞ」

彼女「わ、私も一緒に良いかな？」

…俺&彼女&友人。…俺&彼女。…どっちがいい？俺よ。

答えなんて聞くまでもないな。

俺「よっし、帰るか。だが、テメーはダメだ。クソ野郎」

友人を置いていき、俺＆彼女のペアで帰る。当たり前だ。

野郎を連れて3人でなんて考え、持ってるわけがない。

彼女の家に行こうとしたが、それはさすがにアレなのでやめておいた。

だが、今度の日曜、遊ぶ約束しちまった。これ来たんじゃない？

俺の人生のハッピーエンドルート来たんじゃない？

…一人浮かれてバカみたいだ。そんな訳…ねえだろ…。

どうせ厄介な事に…。

そんでもって日曜。

おいおいおい、日曜日来ちまったよ！

どーすんだよ。俺、デートなんてしたことねえぞ！！

年齢〃彼女いない暦なのにどうすんだ！

なんか、公園待ち合わせって言ってたけどよ…いいのかこれで。

待ち合わせ時間2時間前だぜ？俺にどうしろと。

ああもうヤバイ。緊張して吐きそう。吐いてもいいかな？ねえ、

吐い（ry

エチケツトタイム中。暫くお待ち下さい。

よし…OKだ。もう吐くモンがねえ。これで吐かずに済むぜ…。

なんか妙に落ち着いてきたけど…うつ。

再エチケツトタイム中。暫くお待ち下さい。

トイレから戻ると、彼女がいた。…まだ1時間前なんだけど。

こんな状態だけど…声かけるしかないよな。

俺「おーい…」

ヤバイ…。ヤバイ…。

「お」の声だけで気付いたのか、俺の方に駆け寄ってくる彼女。

いや…ゴメン…ちょ…タンマ。

彼女「…大丈夫…ですか？」

俺「いや…ムリかも…」

猛烈に腹が痛い。何で…何で…。俺の初デート…。

何度もお見苦しいシーンで申し訳ない。

と、言うわけで、今、彼女の家。

俺の体調が戻るまで、公園の続きを纏めたから見せてくれ…。

腹ヤバイって！。川じゃないけど、マジヤバイって！

俺「ちょ！ ごめ…腹が…あつ…。……」

大丈夫、少しだけだから！

←
俺の家へ。

←
OK。復活。

←
デート無理。

←
あれ？ 彼女の家へ。

こんな感じだ。お分かり頂けただろうか？

少女「…おもらし」ボソッ

俺「……………」

…泣いてもいいよね？ 本気で泣いちゃうよ？ もうすでに涙目
だけど。

俺「なんで妹ちゃんがその事知ってるのかな？」

少女「お姉ちゃんに聞いた」

…はい。そうですか…。もう俺…学校行けない…。

俺「もしさ、お兄さんが学校行かなくなったら、妹ちゃんが世話してくれる？」

少女「嫌」

…ですよねー。…何聞いてるんだ俺は。

でも、こんなこんなかわいい子にお世話されたら嬉しいよな…。

それから1ヶ月が過ぎた。

もちろん俺にはアレなあだ名がつけられた。

ん？ なんでバレた？

俺「ちょいちょい。…ちょっと来い」

手招きで彼女を呼んだ。人気ひとけがない場所に。

彼女「こ、こんな場所連れて来て…。そんな事は学校じゃ…」

…こいつこんなキャラだっけ？ まあいいや。

俺「なんで『あの事』バレてるの？」

彼女「アレがアレでああなったから？」

…こいつに聞いた俺が間違っていたのか？こいつ以外には知られて…。

俺「そ、そういえば、妹って何歳？ 学校は？」

彼女「11歳。小学校5年生かな？ 学校は…ほら、あれだから」

…これは聞いた俺が間違ってたな…。

学校に言っていないのに日本語が云々は…察してくれ。

とまあ、仲良くなったんだよ。前よりいつそうな。

デートもするよ、これからな！

そういう訳で彼女とショッピング。…と言う名の晩飯の買い物。

いや、ショッピングでいいよな。shoppingだもんな。

買う物買っただけで彼女を家まで送る。最近がこれだ。

俺「じゃーな。また明日」

彼女「うん」

これでいいんだ。これで。十分に充実してるじゃないか。

彼女「ただいまー」

・・・返事がない。絶対にいるはずなのに、返事がない。

彼女「いるんでしょ？」

彼女がリビングの扉を開けた瞬間、暗闇から声がする。

少女「おかえり」

いつもの事ではあったが、今日は様子が違うらしい。

彼女「ど…どうしたの？」

少女「最近、あの人と仲がいいんだね」

彼女「う、うん。まあね…」

何か、自分の体の奥をかき混ぜられてるような感覚。

少女「あ姉ちゃんはお姉ちゃんだよね」

彼女「な、何言ってるの…？ お姉ちゃんだよ？」

怖かった。いつもの妹じゃないみたいで。

そう。妹の皮を被った何かみたいで。

少女「そうだね」

会話が成立しない、おかしい返事を返される。

足の感覚がない。足はきちんと『ある』。なのに『ない』。

感覚だけが、どこかへ行ってしまった。そんな感じ。

翌日。

俺「なあ、今日あたり、家にお邪魔しちゃってもいいかなー？」

彼女「…」

…あ。俺スベった…？ 恥ずかしすぎる…タスケテ…。

机に伏せて、ションボリしてる俺に気付いたのか、ようやく話しかけてくれた。

彼女「あ、えっと…ごめんね。考え事してて…」

そーですか、そーですか。そんな言い訳みたいな言い訳したって…。

なおも机に伏せ、動かない俺に対して…

彼女「家なら大丈夫だよ」

…聞こえてるじゃねーか…。何だよ、考え事ってよ…。

家。もちろん彼女の。

彼女「やっぱり来るんだ」

俺「良いつて言ったじゃん」

彼女「そうだけど…」

家の中に入ると、やっぱり暗い。仕方ないけど。

彼女さんは自分の部屋に着替えに行った。覗いてやろうか…。

そしてやっぱりリビングにいる少女。いつ見てもかわいい。

俺「妹ちゃんはどうしていつもリビングに？」

少女「…」

何だよ…。みんな俺を無視しやがって…。

そっちがその気ならこっちだって！

俺「…」

少女「…」

こう…見つめていると…吸い込まれるというか…意識が遠のきそうになるというか。

そんな感じがする。赤い目の奥に引きずり込まれるみたいな。

それほどかわいって事なんだろうな、きっと。

彼女「…何してるの？」

少女「…」

俺「…」

まあ、そうなるわな。普通は。

俺「無視されたから見つめてる」

俺ってバカじゃね？　なんで少女と張り合ってるんだ？

おとなげ
大人気ないな…。止めよ…。

その後は、彼女と暗い部屋で明るい話。

特別なことではなく、学校の事とか、日常の事とか。

話題はいくらでもある。

ずっとこの楽しい時間が続けばいいのに。そう思っていた。

少女「…」

そうも言っていていられず、時間は流れていく。

終始、視線を感じたが…まあいいだろう。

じゃあな。と言って家に帰る。明日も来てやるよ、なんて言ったりして。

少女「…」

彼女「いつまでそんな所にいるのよ。こっちにおいで」

少女「…」

彼女「？　どうしたの？」

少女「お姉ちゃん、楽しそうだった」

彼女「うん、楽しかったよ？」

少女「……」

彼女は不思議に思っていた。

けれど気付かなかった。気付くはずがなかった。

少女の秘めた心に。

翌日。

土曜日。何事も無い朝。

俺「今日も行ってみつか！」

自転車で彼女の家に向かう。

そう言えば、なんで自転車って書くんだろうね。

車輪が自ら転ぶから？ 今日転ぶのは自分の運命かもしれないよ？

ピンポン…

俺「来ましたよー」

しばらくして、玄関の扉が開く。まだ気付くはずがない。

彼女「おはよ。入っていいよ」

『自転車を止めて』家の中へ。

いつも通りの暗さ。さすがにもう慣れた。そしていつも通りの少女。

俺「いつ見てもかわいいね」

少女「…」

…おい…また無視かよ…。もういいよ…。

お茶を貰って、また会話。他愛も無い話。だが、いつもと何か違う。

俺「…どうしたの妹ちゃん」

少女は俺にぴったりとくっつく。なんで？ 知るかよ…。

少女「…。…お姉ちゃんの事好き？」

俺・彼女「！？」

思わずむせちまったよ！ い、いきなり何て事を！

少女「ねえ」

心なしか、いつもの目に光が無いような感じがした。

っていうか、その目やめて。吸われそう。ダ。ソんじゃないんだから。

少女「ねえ」

……。…はっ！？ 意識を吸われた感じがした…。大丈夫だよね？ 俺、大丈夫だよ？

これだけは慣れない。アルビノの特徴みたいなものだろうか。

俺「す、好きだよ」

彼女「もう…ばかあ…／＼／」

言っちゃったあああああああああああああ！！

自分でも赤くなってるのがわかる。

少女「…」

それを聞いた少女はリビングの扉の方へ行き、足を止めた。

俺を見つめたまま。

俺「着いてこいってことか？」

少女は喋らずに頷いた。

彼女「あ…」

俺「大丈夫だつて。ちょっと遊んでくるだけだから」

少女は俺がついて来てるのを確認しつつ、2階へと導いた。

そついや2階に行くのは初めてだな。

少女はある部屋の前で止まった。手招きをして、その部屋に入つていき、扉を閉めた。

俺「入って来いって事か。…いいのか、勝手に入って…？」

いいよな。呼ばれたんだもん。でも一応ノックはしておく。

俺「入るぞー？」

ガチャ。これが最後に聞いた音。

そして、視界には、今まで一度も俺に笑わなかった少女が笑っている。

髪を赤くして。

いや、赤いのは髪だけじゃない。顔、服、全部赤くなっていた。

冷たい笑顔で、俺に何かを当てている。

俺の腹部には冷たい何か。

少女「お姉ちゃんは、私だけのモノ」

冷たい物を抜くと、再び俺に突き刺した。

少女「お姉ちゃんに纏わりつく害虫め」

さらに刺す。

少女「お前なんか死んでしまえ」

えぐる様に。

少女「死ね」

彼女「何か倒れるような音がしたけど…大丈夫？」

心配した彼女が2階に向かう。そこで見たのは…

少女「お姉ちゃんは、私のだよね」

アルビノのはずが、全身赤で、手に包丁を持ち、こちらに近づいてくる自分の妹。

彼女「いや…来ないで…」

冷たく笑い、包丁をこちらに向ける。

少女「悪い虫は退治したよ、お姉ちゃん。ずっと一緒にいようね」

ペタペタと血の足音をつけて彼女に近づく。

暗い家に、赤い血と、赤い目が光っていた。

少女「逃げないよね、お姉ちゃん」

（後書き）

長かった…。打つのに4時間もかかった…。

まあ『模試の度に1作品』は守りますよ。余裕のある内は。

ヤンデレ、そして初の百合、初のアルビノ。

小説のキーワードに「ヤンデレ」はあった。「アルビノ」もあった。でも「ヤンデレ」「アルビノ」両方入っている小説は見つからなかった。

無いなら書いてしまえ！…でこんな結果に。

アルビノのイメージとして、幻想的や神秘的といったのがありますが、自分的に解釈したらこうなった。反省も後悔もしていない！

皆様、長い駄文を読んでくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7039o/>

アルビノが赤く染まる頃

2011年10月7日02時01分発行